

祝
第100号

金沢学院大学同窓会「翠会」の平成十六年度総会は八月一日、金沢ニューグランドホテルで開かれ、石田寛人学長が「大学から発信すべきもの」と題して記念講演をしました。石田学長は「アマチュアのような柔軟な発想ができるプロを本学から出し続けるように努力したい」と抱負を語りました。

アマの発想でできるプロを

翠会の名前の由来は学生便覧に、命の源である緑に囲まれ、恵まれた環境の中にそびえ立つ学園の中で建学の精神が培われ、育つのを見守ってゆこう」という意味を込めたと書かれている。一般的に緑（青）は季節の春、方角では東を表し、これから伸びゆくものを意味する色である。緑や青の反対色は何かというところ、ボクシングのコナーは赤と青だが、柔道着は青と白で対戦する。白虎（びやっこ）と青龍は対峙する位置にいるし、親しい人を見る目は「青眼」、自分の気に入らない人を見る目は「白眼」という。白は何に對しても並存する色、反対の色なのである。

専門性持たせ送り出す



石田学長 翠会総会で講演

相撲の世界では、勝ち白、負けは黒、犯罪に關しては白は潔白、黒は犯人を指す。黒は必ずしも悪いことばかりでなく、柔道ではプロはアマにない知識、総合的見識を持つている。アマの発想を具現化するのにはプロの技術、技法である。大学は新しい卒業生を毎年送り出している。これからもぜひ、プロとしての人材を送り出す必要がある。職業教育の場「だけ」でなく、自分の生きてゆける分野を知り、自分は何をやりたいのかをきちんと身につけて世の中に送り出すことが大切である。卒業生には、プロの技法、技術、心組みを大切に、それを身に付けた人間であってほしい。いつも新鮮に世の中と向き合うには、アマのような発想、フレキシブルに対応する柔軟な発想も大事である。学院大から発信すべきものは、アマらしい新鮮な発想を持ち合わせたプロの卒業生である。すばらしい若い人を世に送り出すことである。

元五輪代表のスポーツ相談も

第2回オープン
キャンパス催す

金沢学院大学、金沢学院短期大学の第二回オープンキャンパスは八月十一日、学内で行われ、来春に受験を控えた高校三年生ら三百六十人と父母の計四百五十人が来校し、本学の学部学科構成や教育内容に理解を深め、施設を見学しました。今回は、元五輪選手である渡辺涼子助教、古章子講師、板倉美紀職員、三人がコーナーを構成し、スポーツ部所属の生徒らの様々な相談に応じました。



元五輪選手による相談コーナー

Tシャツ、うちわづくりで交流

本学でジャパントメント職人大学校



第十七回ジャパントメント世界留学生交流・いしかわ2004の催しの一つとして、金沢職人大学校」が八月四日、本学などを会場に行われました。本学では留学生十四人と在学生六人が、現代と伝統をテーマに、Tシャツとうちわ作りで交流しました。

留学生は、パソコンに自分たちで撮影した写真を取り込んで図柄をレイアウト。特殊シートにプリントして、白生地に転写する手順でTシャツを仕上げ、出来栄を批評し合いました。写真。



公開講座の翌日、義援金を手渡す木梨教授（左）=9日、新潟日報

学校法人金沢学院大学は、七月の新潟・福井豪雨による被災者を支援する募金を行い、教職員から計二十万一千五百九十四円が集まりました。半額の十万七百九十七円ずつを八月九日と十日、両県へ贈りました。また、実家が被災した新潟県長岡市出身の皆川明永さん（経営情報学部二年）に見舞金五万円を贈りました。